

5 E地区の出土遺物

13世紀後半～14世紀を中心とする珠洲焼（石川県）が出土しています。土師質土器の皿・小皿には、この地域の特徴である底部をへうで切り離したものが含まれます。また、輸入陶磁器の青磁も少量あります。このほか、井戸から刀子や釘など鉄製品が出土しており、木材の打ち割り等の加工に用いられた可能性があります。



珠洲焼 甕・片口鉢



土師質土器 皿・小皿



青磁 碗



鉄製品（刀子・鉄・釘など）

6 まとめ

境塚遺跡は13世紀前半頃から開発が始まり、13世紀後半～14世紀前半にA地区の居館とD地区の道が同時に形成されたと考えられます。居館には堀が巡らされ、内部に県内最大級の大型井戸が作られます。出土品には中国天目などの貴重な舶載品があり、有力者が存在した可能性があります。一方、道は幅約6mと県内でも大規模な部類に入り、北東側の安野川を越えた山口野中遺跡まで直線的に続いていることが確認されています。もう一方の南西側は百津潟に通じており、百津潟と現在の水原市街とを結ぶ幹線道と考えられます。この道に沿って掘立柱建物が整然と立ち並ぶことから、本遺跡は中世百津潟の湊町の可能性があります。

大型井戸が作られた1301（正安3）年頃は、白河荘の山浦四箇条・水原条・船江条の地頭職である大見行定、安田条の地頭職である大見時実が活躍していました。広域に及ぶ幹線道の整備とこれを基軸とした町場の形成には、こうした大見氏の関与があったのかもしれませんが。

14世紀後半～15世紀前葉になると、道の廃絶とともに遺構がほとんどなくなり、居館も堀がなくなり縮小します。百津潟周辺の遺跡の盛衰と中世の町並みについて検討が深まることが期待されます。